

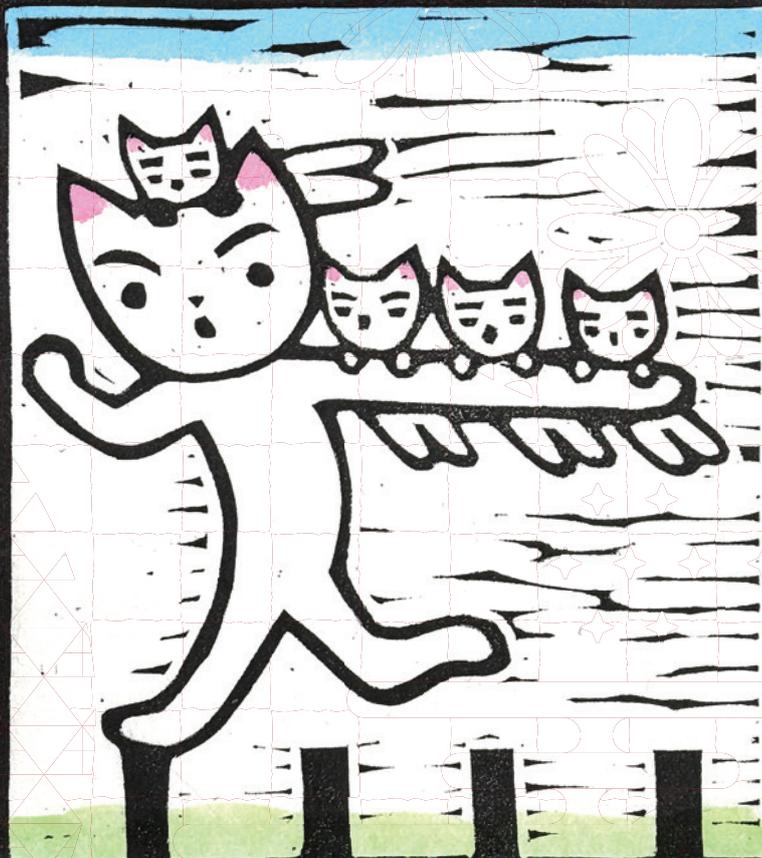


ららばい、通信

2025年
新春号

令和七年
あけまして
おめでとらばいごます

よし、こうしょう!

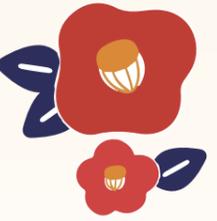


決断コール実行

画 / 大野隆司

[目 次]

- 子守唄憲章1
- よみがえれ 子守唄 西館 好子2
- 子守歌(唄)は永遠に 宮崎 直子4
- 37年振りの再会 藤澤 昇6
- COLUMN / 巨大蛇の石像 黒姫様9
- 連載 / わらべうた 童謡 詞華抄9 尾原 昭夫10
- 連載 / 子ども虐待は、今 オレンジリボン発祥の地、小山市で 川崎 二三彦14
- 連載 / 日本子守唄紀行 「おいよ才平は」 鵜野 祐介16
- 連載 何はさておき寄り添い合うことだ 帯津 良一18
- 連載 / 直島便り 皆でコメ作り 山根 光恵20
- 活動報告21
- 寄付者名簿



令和7年
ららばい通信新春号を
お手元にお届けさせていただきます。

あけましておめでとございます

日本ほど祭りや年中行事が多くある国はありません。一年のけじめ、リズム、地域性、家、それらをひたすらつくるめて行う行事は、その土地の特色を生かしてどこでも盛んでした。四季があり、南から北まで縦に長い国土は多様な生活文化に彩られ、日本をより豊かにしていたのだと思います。

私が生まれ育った浅草は一年中祭りと行事がありました。暮れには来年の準備、お酉さま、べつたら、羽子板市、大掃除、お飾り、餅つき、おせちづくり、門松、しめ縄、七草がゆや晴れ着の準備、と目の回る忙しさ、子ども心浮き立つ月でした。立ち働く大人をみてとても幸せな気分になっていたものです。

しかし、コロナ以来一変してしまいました。久しぶりに浅草を歩くと、まるで故郷を失った寂しい気持ちになります。住んで暮らして交わって、といった中で生まれる温かさや感動がなくなり、心冷めるものがあります。

1月はやはり新しい年の始まり、今年は巳年、豊穰とお金に縁を持つ神がやって来ることを信じて、私はすでに暮れから、普通通りの年迎えの用意に没頭していました。パジャマでのんびりだらだらしたいという孫たちを尻目に、亡き祖母や母に倣い、我が家に伝わる正月行事をしっかりやっていきたいと張り切っています。

今年もどうぞ皆様に良いことがありますよう祈念申し上げます。

日本子守唄協会 理事長 西館好子

子守唄憲章

子守唄は 親と子の愛の唄です
子守唄は いのちの讃歌です
子守唄は 人と人の心をつなぐ唄です
子守唄は 人の心をやわらぐすま唄です
子守唄は 人々の平和をはぐくむ唄です



日本子守唄協会は今年設立25周年を迎えます。

長い歴史のなかで、縄文時代から人から人へ歌い継いできた子守唄を残しつつ、これからも活動していきたいと思えます。子守唄が人の原点にあるものだからです。

シリーズ 替女―祈り③

雪地藏

国見 修二（詩人）



〈替女さ替女さ 雪の中よう来た〉

真っ白い雪道ございて歩いた
雪、雪、吹雪になった

頭だけ見える地藏さまに
雪を払って手を合わせた

〈替女さ替女さ 雪の中よう来た〉

疲れも吹っ飛んで
雪があたたかくなった



替女は二月や三月の雪の季節でも巡業して村々を訪ね歩いた。足袋をはくとしもやけになるので、素足に草鞋をはいて歩いた。

よみがえれ

子守唄

日本子守唄協会 理事長 西館好子

篠塚龍則

大正十二年一月二十七日生

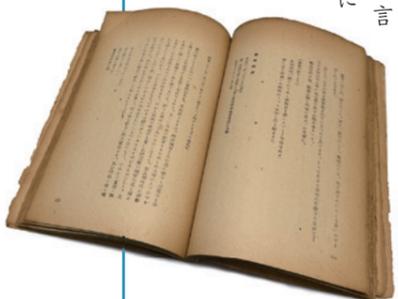
第一高校を経て昭和十八年十月文学部教育学科に入学

昭和十八年十二月入宮

昭和二十一年一月三十一日

ルソン島イザベラサンチャゴで戦病死

僕の好きなもの一つに童謡がある。又民謡もすきだ。柳田國男さんの話に依ると民謡はその土地の人々の生活苦から自然と生まれたもので、苦しい生活を慰安するためその土地の人々の口から生れた等しい感情をこめた歌であつて、代々に傳はつて古いものになると、奈良朝時代の面影を止めてゐる民謡もあると云われてゐる。だから民謡を研究する事に古代民族の國家生活も窺ひしり得ると思はれる。だから日本人ならばやはり心情にぴつたりするものがあるのだらう。又びつたりしないものは長い間にいつのまにか忘れ去られてしまつたのだらう。それから童謡・特に子守唄だが、此の中に含まれてゐる言葉も、代々世を経るに従ひ變化する。其は印象を強く残してゐた文句を他の場合に應用して用ふるからである。



ねんねん子守はどこへ行た
山を越えて里へいた
里の土産は何々か
箆筒長持挟み箱
それほどもたせてやるならば
又から歸れと思はずな

雨が降つてゐたが今日も演習に出かけた。鐵砲持つて走つて行つて伏せたら汚れた草々の葉に美しい露が置いてあつた。今まで戦闘を目的として駈て来た自分とは全然列個の静かな世界があつた。『静寂』は偉大を生むと言はれてゐるが、確かにそこには、美しい小さな分野が隠れてゐた。「小さなもの、それをじつとみつめてゐると、そこには一つの大きな世界がある」とはトルストイの言であるが、本當にきれいな露の中には宇宙の一分子たる神祕が秘められてゐる。小さなものを『みつめる』心、そんなものが今俺には必要なのではないかと思はれる。

秋の野に咲ける秋萩秋風になびける上に秋のつゆおけり

1947年12月4日 発行
編集者 東大戦没學生手記編集委員会
発行者 東大協同組合出版部
「はるかなる山河に」 定価70圓

ここで記憶された子守唄は東北地方の子守唄として今に伝承されているものと思われます。

箆筒長持挟み箱 それほどもたせてやるならば 又から歸れと思はずな

はその土地で付け加えられたもの。

「こんなにもたせてあげるのだから、嫌なことやつらいことがあつても、実家などに帰つてくるなよ」といったものです。これは子供に言い聞かせるより、母親に自覚させるもの、歌う母親は愚痴など言つて、里の親たちに「ならば帰つておいで」と思わせまいといった覚悟の気持ちで載せたのでしょう。

篠塚さんは東北に縁のある方なのかもしれません。この長持ちの唄は広く宮城県で歌いつがれてきた伝統的な子守唄です。最もこれを覚えていた女性が他県に嫁いだ時は、そこで歌われることもありますから、ぜったい正しいということがないのが子守唄でもあるのですから。

篠塚さんの最後はきつとこのうたに見送られて旅立つていったのではとの思いがよぎります。

〈大切な子守唄〉

「子育ては親育て」一人の子どもを人間に育てるのは大仕事です。その基本に親は我慢や忍耐や、心の幅や笑いのおおようさなどの多様な知恵をフル活用しなくてはなりません。

言葉も話さず、世の中も知らず、歩くこともできない赤子のうちから、意味も言葉も分からない子供は体で、五感で記憶している「刷り込み」という宝

物です。

母親は命の伝達者としての役目をしています。そのよりよい処方箋が子守唄なのです。

母親が身ごもつた時にすでに共同生命と一緒に歩き始めています。

母親の心身の状態は体内の子どもにツーカーと通じ合うようになってゐるのです。

おなかの中では何も見えないし聞こえないとおもひでしょうが、いよいよ、立派に感じて、聞いて、わかっているのです。育児はすでに胎児から始まつているのです。

出産はもつと大変です。

産道を降りてくるときの激痛は言葉では言い表せんが、この苦しい時、生まれる子もまた苦しい思いをしているのです。しかし、この苦しみの中で、お母さんの免疫は確実に伝わり、当面の細菌防止になることは確かです。

さらに育児は大変です。頭の回線を体の細部までつなぐコンピュータの組み立てをしなくてはなりません。寝ない、泣く、暴れる、の段階で母親の体力は相当疲労困憊に達します。ここから「唄」は本格的な役目を発揮します。

「子守唄」は赤子に唄われるとおもひでしょうが、実は自分の心のストレス発散と疲労回復と、悟りが入っているのです。

「うた」の基本は「訴える」です。論じるのではなく、節をつけることで体が一定の労働リズムを作ってくれます。どうしようもなければ泣く子の耳元で、同じトーンで一緒に泣いてみてください。きょとんとして泣き止みます。

なんだかんだと対で作られていく赤子との間に

78年前に出版された、戦没した東大生の遺稿集の遺書の中に、この一文を見つけました。

多くの遺書は最高学府の東大生らしく理性と教養にあふれ、戦中においても人人生感、自己分析、残されるものへの配慮に富んだものばかりでした。

唯一、子守唄に触れ、子守唄から小さな命への慈しみに心をはせる感性和、憎む理由もまして殺す理由もないのに銃を向けなくてはならない日常のギャップに青春があつたということに、悲しさよりむなしさを感じます。生きていればご自分もまた我が子に子守唄を歌つたであらうにと胸の詰まる思いです。

ねんねんころりよ おころりよ
ぼうやはよい子だ ねんねしな
坊やお守は どこへ行つた
あの山こえて 里へ行つた
里のみやげに なにもろた
でんでん太鼓に しょうの笛
起き上がりこぼしに 振り鼓

前記の子守唄は江戸時代中期に流行した子守唄の原型「江戸の子守唄」の類歌です。類歌とは同じ種類に属するというものです。江戸の子守唄は江戸から発生し歌い継がれて日本全国にあつたという間に広がりの土地に定着しました。武士の時代が終わる、子守唄は平和の象徴として人が人になつた心の財産と言えるかもしれません。

日本全国の気候や風土はみんな違います。生活様式も子育ても違つてきます。その土地にあつた、あるいは愛郷心によつて、唄も歌詞も特色の違いをもつていたのです。

リズムや声の高低やお母さんの演技力のある知恵が入ると、どちらとも信頼という人間の力が備わつてくるというものです。

この唄をなくしていいわけではないのです。昨今、子供たちの痛ましい事件が増加し続けています。親がいなければ到底生きていけない子供たちの虐待や殺人までも増え続けています。生きることさえ実感のない子供の自殺も増えています。

こどもを産み、産せることはできても、育てることができない大人たちが増えているという社会になつたということなのでしょう。子守唄を歌つている情景に会うこともなくなりました。町に子供の声がきこえるということもなくなりました。

生活は富んでも心の貧しい大人たちの多くいる国が先進国であるわけはありません。文明や科学がどんなに進歩し発展しても、優しい社会、守るべきものために生きられる喜びを感受できる暮らしを目指す必要があります。子守唄が平和の歌であるということをおぼろげに感じたいと今も思ひ続けています。

日本子守唄協会、二代目会長の小林登先生は、海軍兵学校で終戦を迎え、東大医学部に入り直して小児科医になり、後年、児童虐待防止に取り組みされましたが、児童虐待が年々増える現状に、「こんなはずではなかった」と、しみじみお話しされておりました。

日本子守唄協会は今年設立25周年を迎えます。長い歴史となつてしまいましたが、縄文時代から人が人に歌い継いできた子守唄を歌い継ぎ残しつつこれからも活動していきたいと思ひます。子守唄が人の原点にあるものだからです。

子守歌（唄）は永遠に

ライン出版「プチぶんか村」編集長 宮崎直子

母は「モーツアルトの子守歌」、父は「五木の子守歌」をよく歌ってくれた。それが私の記憶に残っている子守歌である。幼少時代に歌ったもった子守歌は生涯忘れないものだが高齢の今になって思う。

また、子どもたちに歌ってあげたのは團伊玖磨作曲の子守歌だったが、ストーリー性がある歌詞を大幅にアレンジしてしまったせい（野上彰さんごめんさい！）、子どもたちは笑い転げて一向に寝てくれなかった。そして孫はいえ、わすか生後ひと月のころに抱いて歌ったのがシューベルトの子守歌。四小節ほどでスースーと寝てしまった。子守歌の威力は絶大である。

ところで、私がことさらに子守歌を意識することになるのは上京してからであるが、その子守歌とは美智子上皇后が皇太子妃のときに作曲された「おもひ子」という曲で、美智子さまは母子愛育会の機関誌に掲載された宮崎湖処子（みやざきこしよし）の詩にメロディーをつけて歌いながらお子様たちを育てられたという。

宮崎湖処子は福岡県甘木（現・朝倉市）出身、明治から大正にかけての宗教家（キリスト教）、小説家。東京専門学校（現・早稲田大学）を卒業

した。島崎藤村が登場する以前の抒情詩人としては比類がないとも評される。代表作に『帰省』。名前に「子」がつくが男性。

『おもひ子』

いづれの星かわが庭に
おちてわ子とはなりにけむ、
汝が愛らしき面には
天つひかりの輝やけり。
いかなる書のかけりとも
微ありともわかねども、
汝が顔ばかりいつ見ても
いつまで見ても飽きたらず。
世のうさゆゑに昼となく
夜となくもる我が胸も、
ひかる汝が目に見られては
はれて嬉しくなりぬなり。

ところの出身であることに驚くのは私だけだろうか。つまり「子守歌（唄）つながら」なのである。

かつて朝倉市の合唱団が「おもひ子」を演奏するという記事を読んだ。ほかに演奏する合唱団をあまり聞かないが、私の住むエリアで演奏してくれる合唱団があればぜひ聴きに行きたい。一緒に歌わせてもらえたら最高である。

最後に、母が歌ってくれた「モーツアルトの子守

「さようなら長田暁二先生」

音楽文化研究家
1930年3月19日生まれ 2024年11月4日逝去 94歳

3才で母と死別、母を慕い岡山の実家の威徳寺の石段を這いながら降り、汽車にひかれて足の先を切断：そんな幼い日の思い出を小茂根の居酒屋「えんまん」で聴くのがとても楽しみでした。ピールは進み、晩年はそれでも5・6本、以前は1ダースが普通でした。

父親が音楽に造詣深く、幼い時から蓄音機でレコードを聴いて育ち、昭和19年11月13日召集海軍少年兵に入隊、終戦の日自宅待機を命じられて以来、現在も自宅待機のままとのこと。兄のいいなづけをさらって上京、29歳で結婚。コロムビアレコードにアルバイトに入り、その後キングレコードに移り、音楽の勉強は人の何倍もなされたそうです。

「月光仮面」のテレビの制作手始めに、童謡、流行歌、民謡、クラシック、とあらゆる分野に精通しています。作曲、作詞、編曲、採譜、企画、宣伝、執筆、何でもござれと音楽に関しては生き字引のような方でした。子守唄でもたくさん教えて頂きました。

「母子愛育会チャリティー・コンサート」のプログラムより



そのチャリティー・コンサートは1969年7月14日に上野の東京文化会館で催され、「おもひ子」が初演披露された。独唱はソプラノ歌手伊藤京子氏、三善晃氏編曲の合唱曲は私が所属していた日本女子大学合唱団が歌うこととなった。皇太子ご夫妻を客席にお迎えし、緊張しながらも舞台上に立つて子守歌「おもひ子」が歌えたことは実に光栄な出来事であった。終演後のロビー、1mと離れていない位置で皇太子ご夫妻をお見送りできたシーンもよく思い出す。

さて、この詩を作った宮崎湖処子であるが、前述したとおり福岡県甘木の出身である。私が出版の仕事で全国を飛び回っていたころ、奇遇にもそのエリアの担当になった。インターネットのない時代に観光物件を市町村別に網羅するという本の製作に携わる仕事だった。取材は過密スケジュールで宮崎湖処子を取り上げるには至らなかった。

歌の訳詞者である堀内敬三氏のお身内が拙宅のほど近いところに住んでおられる。そんなことにも子守歌が結ぶ縁を感じるのである。こうしてみると子守歌（唄）というものは親子の情愛を育むばかりではなく、人と人を結びつけるツールであり、不思議な力を秘めているといえそうだ。子守歌（唄）に触れる機会をもっと増やしていければ世の中がいくらか明るくなるはずである。

本当にお世話になりました。本当によく飲みました。一緒に旅も多く、先生との話題は尽きません。岩手県北上市のサトウハチロー記念館を訪ねた時、サトウハチローの略歴にある人名一覧を見て、間違いを即座に指摘するのを拝見、あんなに記憶力の良い先生はいませんでした。

最後にお会いしたのは昨年（2023年）の暮れ。まもなく著作が500冊目になること、書齋の全資料を熊本菊池市に贈呈を決めて作業していることなど話されていました。

これからの音楽は？

「シンセサイザー一つでオーケストラができるようになる」

最も日本で歌のうまい人は？

「美空ひばり」

子守唄を歌わせるとしたら？

ちあきなおみはうまいけど彼女はジャズが歌いたいというでしょう。金沢明子かな

そんな会話が最後でした。本当にありがとうございました。

（西館記）



甘木公園の「おもひ子」碑
撮影：プチぶんか村

時を経ること約半世紀、2017年6月。福岡県大川市の清力美術館で「近藤征治個展及び松永伍一詩画展」が開かれ、九州に赴くことになった。近藤征治氏は私と同じ埼玉県新座市を拠点に制作活動をしている市井の画家で、松永伍一氏の愛弟子である。東京練馬に住んだ松永氏とは地理的に近いこともあり、特に晩年は交流が盛んだったと聞く。故郷の福岡県三潴（みずま）郡大木町における松永伍一氏の「村」という詩碑建立（2018年）や、下仁田村の「女性村ねぎぼうず」の松永伍一の部屋の設置（2024年）等にも尽力された。ご承知の通り松永伍一氏は詩人、文筆家、画家であるばかりでなく日本子守唄協会の創始者でもある。

話は戻るが、大川市で松永氏と近藤氏の展覧会を鑑賞したあと、久留米市へ出て「おもひ子」の詩碑に立ち寄る計画を立てた。甘木公園の一角に念願の詩碑を見つけたときの感動は筆舌に尽くし難い。詩碑には「おもひ子」の譜面と詩が刻まれ、裏面には建立者の挨拶文が刻まれている。当日も激しい雨の中の取材であったが、そのすぐ後に甘木公園のある朝倉市一帯は全国規模の豪雨に見舞われた。

日本子守唄協会を立ち上げた松永伍一氏と、「おもひ子」の作者宮崎湖処子が福岡県内のほど近い

37年振りの再会

社会福祉法人岩手愛児会会長 藤澤 昇

児童養護施設

みちのく・みどり学園について

みちのく・みどり学園は昭和32年に虚弱児施設として開設され、平成10年に児童養護施設に移行しました。

児童養護施設は児童福祉法に定められた児童福祉施設です。保護者のいない児童や虐待を受けている児童、その他環境上養護を要する児童を入所させて、自立のための援助を行うことを目的とする施設です。児童養護施設では概ね2歳〜18歳の子どもたちが暮らしています。

みちのく・みどり学園は、その中で全国でも希少な医療系児童養護施設です。施設内には子守唄会館も作られています。

みちのく・みどり学園ホームページ
<https://www.aiji.or.jp/pages/23/>



行事のきっかけは、三陸沿岸宮古市出身の中学3年生男子が、糖尿病を患い家庭内暴力を併発し、緊急入所となった(コーラを大量に摂取し、それをなだめる母親に掃除機の柄等で暴力を日常的に振るうため)。日々の施設療育のなか、自信を取り戻した彼は、「家では絶対に暴力はしません」と、家族に誓約書を書いた。「であれば絶対大丈夫の証拠を具体的に示そう」と、二人で話し合い、彼の自宅(宮古市)から盛岡(施設)まで、110^キを3日間、他の仲間を入れて歩くことを決めた。

各々私物をリュックに背負い(約3キロ)、厳冬の雪道(2日目に目指す北上山脈区界高原は夕方零下10度以上になる)を長靴履きながら、私と中学3年生男女5人で黙々(1日目30^キ・2日目40^キ・最終日40^キ)と歩いた。

沈黙だけの3日間の行軍で、印象的な言葉と仕事を今でも思い出す。アル中家庭の心身症のA子は「私強くなったのかな」と鼻水を垂らしながら言った。両親が教師の神経症のB子は「自分の小さな悩みが気が付いた。自分が素直になれた気がする」と言った。大手自動車販売会社を父が経営する不登校のC子は「歩いて幸せになれ気がする」と言った。自宅にいる教師の父親に石を投げつけた、家庭内暴力のD男は何も言わず、リュックの重さに耐えかねたA子の荷物を手に持ち「がんばれ」と声を掛けた。そして糖尿病の彼は「これで家に帰れる」と言った。私は2日目で太腿の筋肉を痛め自転車のチューブ(万一のため密かに持参していた)を巻き歩いた。この3日間は傍で難行苦行に見えるが、実は足のマメや

筋肉痛以外なんの苦しみもなく、不思議な一体感が生まれた。体力限界の最終日は、施設に近づいた時に足取りが軽くなった。「もう少しでみんなが待っている学園だ」と。

このみどり学園の冬の伝統行事が平成19年まで24年間続き盛岡の冬の風物詩になっていた。冬道、国道106号線の通行中のバスやトラック運転手さんは、子どもたちが歩き易いようにと道を譲ってくれ、わざわざ乗用車から窓を開け声を援をくれたり、沿道から激励の言葉や飲み物の差し入れを頂くこともあった。

この伝統行事も徐々に「体」を成さなくなってきた。みどり学園が法の改正で虚弱児施設から児童養護施設に移行し、入所する子どもたちの様子が徐々に変化してきた。

児童虐待防止法(平成12年)が出来て更に被虐待児の入所が多くなり、従来の病虚弱児との混在は、施設の子どもたちの生活様式を一変させ、施設養護の在り方を根底から変えざるを得ない状況になった。仲間との生活の共生から一体感を作り、自立を目指す育ち合いの「社会的養護」から、現在は一人ひとり実状に沿った(トラウマインフォームドケア)「社会的養育」が施設に求められるようになった。このため集団で行われる伝統行事はみどり学園でも自然に衰退していっ

この週末(10月の連休)に嬉しいことがあった。東京都文京区に住む退園生と37年振りに我が家で再会した。盛岡から宮古まで3日間100^キ踏破の他団体主催の引率ボランティアのため来盛した。主催者から私に、東京からのボランティア参加名簿をみて、「もしかしてみどり学園の退園生では」との連絡があり、確かめたらそうだった。であれば「前日に我が家に泊まっていいよ」との誘いに応じてくれた。その日は彼と関わった旧職員も招き、久しぶりに賑やかに談笑した。

現在彼はIT関係の仕事に従事し50歳になったとのこと。盛岡工業高校電子科卒業後地元を離れ、東京で二度の転職を経て現在の仕事に就いた。仕事は人と群れることはなく(本人の言葉)大手百貨店のシステム管理でパソコン画面との監視が日常とのこと。時折深夜に思い立って、自宅から一人でレインボーブリッジまでひたすら夜通し歩いたり、小田原から築地まで「一昼夜24時間徒歩」の行事に参加したりした。いつか必ず自分がみどり学園時代に歩いたコースをたどりたいと思い、今回ネット検索し、主催者のボランティア募集を見つけ応募した。

みちのく・みどり学園(以下みどり学園)では、昭和59年に「第1回宮古〜盛岡間厳冬の110^キ踏破訓練」を実施した。当時の施設種別は虚弱児施設で、「心身症」・「不登校」・「家庭内暴力」の身体虚弱の子どもたちで、定員80名が常に満員であった。いわゆる、「子ども病理」に家庭問題が背景として表面化した最初の年代であった。

た。この推移致し方ない、が私の現状での実感である。

現在その行事は任意団体の「100^キあるいて海をみよう！」実行委員会が主催し、盛岡から宮古まで(みどり学園の逆コース)の踏破を秋の恒例行事として毎年実施おり、みどり学園はその共催団体になっている。

「今回の参加理由は」と彼に聞くと、「50歳になり、人生いろいろな区切りがだったので」と話していた。当時私はこの行事の最終の願いは、「何時か誰かが、昔、歩いた人が(園生)今度は、子どもを連れて歩いてくれる日が来ればいい」と思っていた。それが今回初めて実現して思いが叶った。」と懇談中に話した。彼は退園年度を追うと第7回踏破訓練の参加者だったということになる。

ちなみに、今回の行事には法人施設のみどり学園(現児童養護施設)から1名とことりさわ学園(児童心理治療施設)から3名の中学生が参加した。

飲食の歓談の終わりころ、「こどもは？」と聞くと、「小学校3年生の男子が一人いる。でも離婚して親権は母親にある」「現在子どもとの面会の件で家庭裁判所と係争中です」との話聞き、その場の箸が止まった。「原因は」「自分のDV」「その時は(いつでも)そうだが)妻にヒステリー状態で暴言を発せられ、妻の錯





巨大な蛇の石像

江戸時代から繭の生産が盛んであった前橋地域、蚕糸業とは養蚕から製糸までをいい、桑を栽培して養蚕を行うことから繭の販売、生糸製造機織りまで農業工業と多岐にわたりました。幕末の横浜開港に伴い、生糸の輸出の販路が拓け、国策の殖産産業として、前橋の生糸

その後の一時期息子が病弱となり、放蕩生活を送るようになり、憂いた信心深い母親(初代の妻が祈祷師に霊視してもらったところ「白蛇を殺しているはず、像を祀り、懇ろに供養すれば、のちのち家業の商運も隆盛するであろう」との

COLUMN

「巨大蛇の石像 黒姫様」

旧石器時代から長い歴史を持つ前橋、総社地区は数多くの古墳が存在していたようです。

その総社に個人の家が所蔵している「蛇の石像」があると伺ったのは、フジコ・ヘミングさんのご親戚、川田利夫さんからです。

川田家の本家に今も祀られているその写真を見せられた時にびっくり。堂々天を仰ぐとぐるを巻いた蛇はまさに威風堂々、圧倒される迫力を持っていました。

2025年は巳(へび)年、蛇は気持ち悪いけど、豊穣金運の神ともいわれます。

自然の災禍はどうしようもないとして、安定した年であってほしいという願いは誰も同じ、縁起を担いで早くに祈願したく、出かけたのは暮れの真っ青な夜空の広がる日の事でした。それにしてもなぜ個人がこの巨大石像を作ったのか、その謎をも知りたく思いました。



「3日間無事に歩き切ることができ、今、岐路についております。今日はこのまま帰京しようと思えます。いろいろお世話になりましたありがとうございます。」

「歩き切ることができた」これは実際に歩いた人でなければ言えない。「このまま帰京しようと思えます」の文面には、昔自分を変えようと、冬の雪道を歩いた自分に出会い、そこからこれからの人生の在り方を確認したように思えた。そのなかに近い将来自分の息子と歩くことを実際に思い描いて、帰京の途に付いたと想像したが、一方で逡巡もした。

彼は父子家庭で育ち虚弱のために入所した。中学3年生で退園し、高校は父親の元から通った。そして東京に就職した。実は実家は我が家から近くの集落にある。今回は実家には顔を出さずでもなく話題にもしなかった。多分父親と同じ



ふるさとの鐘

境遇となり、子どもの親権で係争中の現状を打破したかったのかもしれない。

今回の参加は彼の並々ならぬ決意であった。彼のこの50年の人生の区切りのなかで、施設の実生活が抛り所となるなら、施設の使命は重要である。それには施設の日々の「生活」は、魂(西館好子語録)※「生活の伝承の積み重ね、人が人に伝えられる唯一の宝」のあるものでなければならぬ。施設は今「家庭(的)養育の本質」を問われている。

「冬の110キ踏破訓練の再開」を期して。※施設業界では「生活」を「養育」か「療育」に置き換えます。

藤澤昇氏 プロフィール

児童養護施設 みちのくみどり学園園長
昭和46年 岩手大教育学部を卒業後、学園に勤務。(体育教師の資格取得)
平成5年 5代目園長に就任。
平成16~17年 全国児童養護施設協議会東北ブロック会長就任
平成17~18年 全国児童児童養護施設協議会調査研究部長就任
平成17年より 社会福祉法人岩手愛児会会長
愛児会は、結核児童、虚弱児施設から始まり、慢性疾患、不登校など変遷する子どもに関する問題に取り組んでいる。
岩手愛児会ホームページ
<https://www.aiji.or.jp/>



ご託宣があった。その霊験を受けて昭和二年、町内の福岡石材店に蛇の石像制作を委託しました。時の当主福岡九十九の手により完成しました。願主は初代川田三三郎です。



川田家のみなさまと右は現当主、川田利夫夫妻

蛇の石像の由来について
川田家当主 川田信也さんのお話
川田家は1700年代江戸時代正徳年間までの過去帳がありますから、今から300年以上続いている家系ということになります。大きな農家だったようです。

大正時代中頃に初代三三郎が絹織物の技術を学び、機織り業に参画、その後現在地にて紡績業を始めました。町内に電気が通じた昭和の初期には機械操業による本格的な絹織物の商いを幅広く営んでいました。像を作りました由来は

大正末期のある日、婿養子であった初代の三三郎の息子(後の二代目三三郎)が父の三三郎の実家の草刈りを手伝いに行った折、偶然に白蛇を殺めてしまいました。

百聞は一見に如かず、川田家の裏手にある巨大な台座にのる石像「黒姫様」は空に向けて見事な神々しさを見せてきています。前橋市総社に一度訪ねてみてはいかがでしょうか。霊験あらたかな年の始まりに。

ハリ鞠蹴ヨ玉打ツ

兎角子共達続

わらべうた童謡詞華抄9

わらべうた研究家 尾原昭夫

蹴鞠 年中行事絵巻
日本の絵巻8 中央公論社



ハリ鞠蹴ヨ

「ハリ鞠蹴手鞠ツコ、正月ガラジャレバ 玉打ツ羽ツカウ、」
前回は、狂言歌謡の「兎角子共達」の前半から、「アイヤノボロボロ」と「ハリウリ」について考察した。今回は後半から「ハリ鞠蹴ヨ」と「玉打ツ」を取り上げ考証し、古典的遊戯への理解を深めたい。
蹴鞠は「しゅうきく」とも言い、飛鳥時代に中国から伝来し、平安時代後期から鎌倉時代にかけて貴族の間に盛んに行われた遊戯で、新年には「鞠始め」とか「初蹴鞠」といった儀式も行われた。「新古今和歌集」の編纂でも知られる後鳥羽帝や、鎌倉幕府の將軍源実朝なども蹴鞠の名手であったから、先のNHK大河ドラマ「鎌倉殿の13人」でも

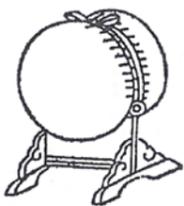


蹴鞠 鳥獣人物戯画
日本の絵巻8 中央公論社

しばしば蹴鞠の場面が登場し、また最近では番組「京の蹴鞠」も悠久に遊ぶ「和の遊戯」が放送されたので、思い起こす方も多いと思う。冒頭に示した図は平安時代の「年中行事絵巻」に描かれた、桜の花の下で蹴鞠に興ずる公家たち。次は「鳥獣人物戯画」から蛙と猿が蹴鞠を楽しむ場面、および「絵本源氏物語」若菜上の蹴鞠の情景、そして「和漢三才図会」の蹴鞠の図である。



蹴鞠
絵本源氏物語



蹴鞠
和漢三才図会

蹴鞠は鹿皮で作られた中空の鞠を用い、「鞠を落とさず蹴り続ける」ことを主眼とし、数人で円陣を組み、一人が何回か蹴ったあと相手に蹴り渡すが、「一段三足」といって三回目に渡すのをよしとする。また勝敗にこだわらず、「一定の高さにあげる」こと、「蹴りやすい鞠を送る」ことを重んじ、その技を続けることにより国家安寧、五穀豊穰、子孫繁栄を祈るものとされる。それが時代の推移とともに次第に格式高く様式化され、名人を生み、流派も成立し、さらに鞠も神格化されていった。

鞠蹴の伝説童話

江戸時代の百科事典、寺島堂安の大著、正徳二年自序「和漢三才図会」に、興味ある蹴鞠伝説が記載されている。

「伝えによれば侍従大納言成道卿(藤原成道)はたいへん蹴鞠にすぐれていた。ある日、人面猿身で三、四歳の小児ぐらいの異人が三人来て、問答あつて、自分達は鞠の性霊であるといった。各(おのおの)の額には金字で、春楊花・夏安林・秋園と書いてある。いつも柳林に棲んでいて、好んで蹴鞠の場所に来て遊ぶのだという。これより後、守護神となるであろうと行って去っていった。いま、蹴鞠の場で、掛声として、「夜化安利遠宇」という詞を発するが、これは彼の額に書いてあつた銘である。いま、いわゆる鞠の神を精大明神と号するが、それはこれである。」
平凡社・東洋文庫(原本漢文からの訳より)

この三人の童子が銘として示す「夜化安利遠宇」と記される掛け声は、「ヤア」「アリ」「オウ」という蹴鞠伝統の掛け声であり、狂言歌謡の「ハリ鞠蹴ヨ」の「ハリ」は、その「アリ」からの転訛であろうとするのが池田廣司氏の説(『狂言歌謡研究集成』)である。

玉打ツ

図に示す「打毬楽」は現行雅楽、唐楽の曲名。唐代西域の胡の国で、馬上で球を打ち遊ぶとき奏する曲といわれる。元禄三年成「楽家録」に「五月五日の武徳殿騎射の後、唐装束を着して馬に乗り、毬手を走らす、これを打毬というなり。その時この曲を用う。因つてこれを打毬楽と名づく」とある。

狂言歌謡にある「玉打ツ」とはこの「打毬」の「だきゅう」のことである。打毬に騎馬打毬と徒打毬とあり、徒打毬を童打毬ともいう。

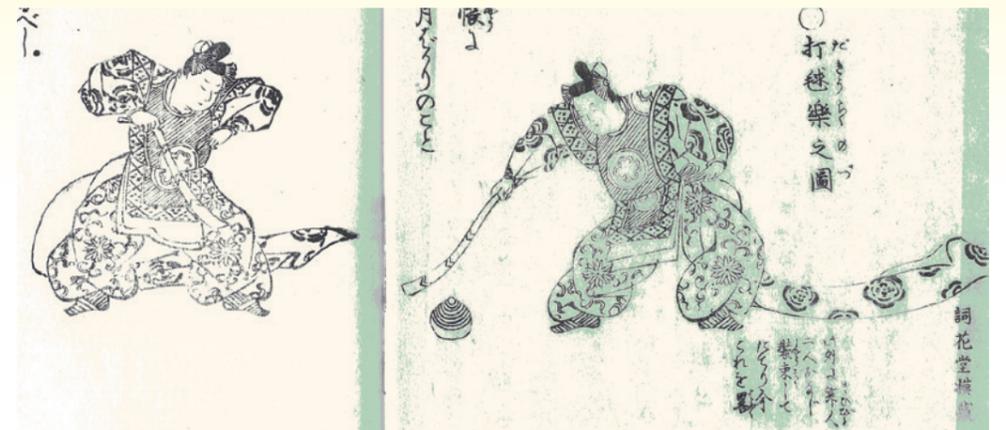
振々毬打a 月次風俗図
東京国立博物館蔵 近世風俗図譜1 小学館



振々毬打b 月次風俗図
東京国立博物館蔵 近世風俗図譜1 小学館



打毬楽
骨董集



毬杖と玉 骨董集



打毬 年中行事絵巻
日本の絵巻8 中央公論社

一方同様の遊戯を「ぎうちょう」「ぎちよう」「まりうち」ともいって「毬打」「毬杖」と書き、用いる「打毬杖」をも「ぎうちょう」という。打毬の方法は、騎馬の数人が二組に分かれ、それぞれ毬杖でもって毬を自分の毬門内に打ち入れ、早く投げ入れた方を勝ちとする、

「蹴鞠」が主に貴族・武家階級に愛好され、子どもたちの遊びとしては記録が乏しいにもかかわらず、現今ではハサッカーとして別な形で子どもたちに盛んに行われているのは対照的に、「毬打」は近世・近代までは子どもたちの正月の遊びとして各地に伝承され、多くの絵や記録が残されているが、反面、現代においては全くその影すら見ることができなくなった。それは形を変えてハ野球にとって代わったということであろうか。

またはその毬の数によって勝負を競う。平安時代に端午の競馬（くらべうま）や騎射のあと之余興として行われたので、NHK大河ドラマ「光る君へ」でもその場面が見られたので記憶に残るところである。

「枕草子」に「正月十日のほど」「ひきはこえたる男児、また、こはぎにて半靴はきたるなど、木のもとに立ちて、「我にぎちやう切りて」など乞ふに」と見えて、当時すでに子どもたちの遊びとなっていたことが確かである。また「徒然草」に、「さぎちやう（左義長）は、正月に打ちたるぎちやうを、真言院より神泉苑へ出して、焼きあぐるなり」とあるように、正月行事の火祭りハ左義長とも関連し、名称と意味、遊戯方法の変化や行事との関連などがからみあい、ひじように複雑に交錯する、まことに難解な、歴史の長い遊戯なのである。

毬杖の子どもの遊戯としての方法を「骨董集」は次のように記す。

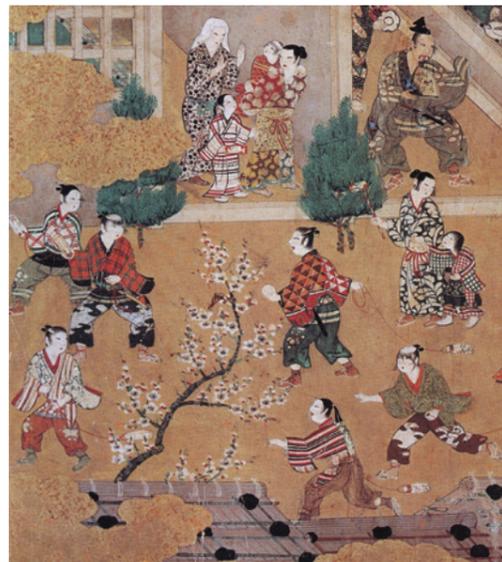
「打やうは、そのあひだおよそ十間、あるひは十二三間をへだて、そのなかばの地上にすぢをひきてかぎりとし、男児双方にわかかれて、かの玉を地上になげめぐらすを、一方より推もてうちとむるなり。とめえずして、かぎりのすぢよりさきへ玉のめぐり越たるを、なげたる方の勝とし、打とむるかたの負とす。あるひはうちとめて、かぎりのすぢより玉をこさせざれば、とめたるかたの勝とし、玉をなげたるかたの負とす。双方はるばるかくすめり。」

江戸後期から明治にかけて、同様の遊びが「ぶりぶり」「ハマ」「マナゲ」「ハンマ」「ハンマヤリ」「マエロブチ」など、さまざまな名称で全国的に広く行われていた記録が多く残されている。以下、近世における子どもたちの「ぶりぶり毬打」を生きいきと描く貴重な図絵を精選し列挙するので、それぞれの遊びの態様や変容を「目に見て」いただきたい。

ぶりぶり羽子突
西川祐信画 絵本大和童



きっちやう 小弓
女芸文三才図会 鳥飼醉雅1771



振々毬打 十二月風俗図
近世風俗図譜1 小学館

第11回「おいよ才平は」(奈良県天川村)

歌には「大きな歌」と「小さな歌」がある。皆で声高らかに歌い上げ、心一つにするのが「大きな歌」で、国歌や軍歌、讃美歌・声明などの宗教歌、それからスポーツ観戦の応援歌もそうだろう。一方、そばにいる誰か、目に見えない何かに向けて、あるいは自分自身のためにそっと口ずさむのが「小さな歌」で、子守唄はその典型である。

「大きな歌」には国や民族やその英雄たちの「大きな歴史や物語」が刻まれている。これに対して、「小さな歌」には歌い手の生まれ育ったイエやムラやマチの「小さな歴史や物語」が刻まれている。そのため、忘れ去られる可能性も圧倒的に高い。数多くの子守唄が生まれ、そして消え去っていく中で、今なお残っているのは奇跡といえるべきかもしれない。奇跡が起きた理由には、歌自体の持つ魅力ももちろんあるだろう。だが、その歌に刻まれた「小さな歴史や物語」を次の世代へと歌い継ごうとした人びとの熱意によるところも大きいのではなからうか。今回ご紹介する「おいよ才平は」もその一例である。

おいよ 才平は まだ戻らぬか

まだも戻らぬ ながの旅 ヨイヨ

ながの旅すりや 身は大切に

人のお世話に ならぬように ヨイヨ

鐘がごとと鳴りや もう去の去のと

ここは寺町 日が暮れる ヨイヨ

(牧野英三『日本わらべ歌全集一七下 奈良のわらべ歌』一九八三・二〇二)

天川村は紀伊半島の中央部に位置し、村の面積の四分の一が吉野熊野国立公園に指定されている。近畿最高峰の八経ヶ岳をはじめとした名峰連なる大峯山脈を擁し、源流域のその一滴は渓谷を渡る清冽な清流となつて、名瀑をはじめとした美しい自然景観を作り出している。

／九、背なを枕に寝る幼子の 頬に涙が光つてたまる ヨイヨ／
一〇、待てど暮らせど帰らぬ人は 死出の旅路にならぬよに ヨイヨ／
一一、生きているなら夢でもよいから おりよ無事かと問うてほしい ヨイヨ／
一二、村のためだと人はいうけれど りよの涙を誰が知る ヨイヨ／
一三、村のためなら称えて唄およ おりよ才兵衛の子守唄 ヨイヨ (京谷友明氏の資料提供による)。

今年(二〇二四年)一月上旬の土曜日、奈良県天川村を訪ねた。大阪府箕面市の自宅から車に乗って、前半は高速道路や自動車専用道路を疾走し、後半は曲がりくねった山道をひたすら走って、約二時間かけて一時間頃に到着した。この日はちょうど「もみじまつり」を開催しており大勢の観光客で賑わっていた。最初に天川村総合案内所を訪ね、ガイドの山崎千里さんに話を伺った。事前に連絡していたこともあって、CD「大峯山麓洞川の子守唄 おいよ才兵衛」(非売品)を聞かせていただいた。「ミーミミーミーファー—ミードー—ミーファー—ラーファー—ミーファミ—ド」という都節音階のみやびな旋律である。

次に、山崎さんのご紹介で、このCDの作成を手がけた元天川村村長・大西友太郎さん(故人)の娘・文子さんが女将を務めている「あたらしや旅館」を訪ねた。創業は江戸時代中期の新しい屋敷右衛門という老舗旅館である。「もみじまつり」も相俟ってひととき忙しい文子さんとお会いすることができなかったが、後日お電話で話を聞くことができた。友太郎さんは村長として天川村や洞川の歴史を継承したいと願って、二〇〇三年頃にCDを作成したという。そして日本子守唄協会の活動をラジオで耳にした彼は、CDを持参して西館好子理事長の許を訪ね、次のように訴えた。「この子守唄は私のふるさとに伝わるもので、村の歴史の中では消すことの出来ない唄なのです。でも、私がいなくなってしまうは、きっと忘れられてしまう。子守唄協会が預かって、消えて無くなるようにして下さいませんか」(西館「にっぽん子守唄紀行」このころの原風景をたずねて 第11回 土地の利権争い・洞川の子守唄、『正論』二〇〇七年12月号)。

「天川村立資料館 ギャラリーほのほの」に行ってみた。受付の年配女性にお声掛けすると地元で生まれ育ったとおっしゃったので、この子守唄のことを尋ねてみた。三番の「鐘がごとと鳴りや」はこの資料館の



二〇〇四年にはユネスコ世界文化遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」として登録され、天川村はその主要な構成要素としての「大峯奥駈道」・霊場「吉野・大峯」の一部を擁し、およそ一三〇〇年前に役行者によって開かれた修験道発祥の地である霊峰大峯山(山上ヶ岳)には、今も多くの修験者が修行に訪れている(天川村役場公式ガイドより要約)。

この子守唄が生まれた背景には、大峯山の登山口である吉野山と洞川(とうがわ)の住民の間の、大峯山の利権をめぐる紛争があるとされる。「幕末吉野大峯山の領分争いで、吉野山と洞川との間で公訴に進み村の庄屋であった才平が単身江戸に上がりその公事に当った。しかし才平はついに帰らず、その恋人おいよが才平を恋慕したさまを、村人が歌い伝えたという」(牧野一九八三・二〇二)。

一九四七年に行われた洞川音楽研究会で紹介された地元古老三名の話では、「才平」は「才兵衛」で、前田家の先祖で村の総代だったという。妻の名は「りよ」。四番以下の歌詞も記録されている。

「四、人の噂でかえると聞いて 今日も待ちぼうけユデの滝 ヨイヨ／
五、山の鳥さえ暇をさがす 又も涙の日が暮れる ヨイヨ／
六、雲が流れる小南峠 坊やの父さんまだみえぬ ヨイヨ／
七、クツ掛け栗橋ニツ岩 聞こえるものは風ばかり ヨイヨ／
八、すすりなくよな暮れ六ツの 鐘の音さえも唯涙 ヨイヨ

隣にある龍泉寺の鐘だろう。おいよ(りよ)の墓所や才平(才兵衛)の顕彰碑などはない。終戦直後にこの街道一帯が大火に見舞われて龍泉寺も焼けてしまったこともあって文献資料は残っていない。この子守唄を知っているのは地元の人の中でもわずかだろう。何とか歌い継がれてほしいのだが、そう話された。

立派な伽藍を配する龍泉寺の庭園は、紅葉が始まったところで青空に眩しく映えていた。朱塗りの鐘楼に吊るされた鐘は、現在は除夜の鐘にしか撞かないそうだが、鐘銘の「宝永六年」(西暦一七〇九年)から、おいよがこの鐘の音を聞いたのだと思いを馳せた。それから、山崎さんお勧めの「きらく九兵衛味処」で、ニジマスが群をなして泳ぐ清流を窓越しに眺めながら「アユの塩焼き定食」に舌鼓を打った後、洞川温泉センターの大浴場でリフレッシュして帰路に向かった。

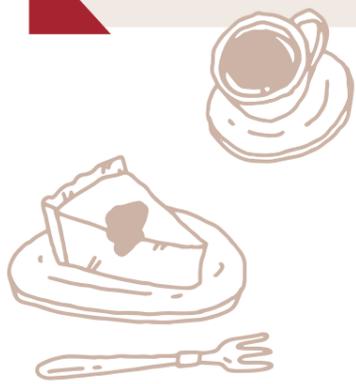
この子守唄が今もかろうじて伝承されているのは、前述した大西友太郎さん・文子さん、山崎千里さんの他、敗戦直後に活動していた洞川音楽研究会、一九六〇年代から奈良県内全域で民謡調査をして『奈良のわらべ歌』をはじめいくつもの著書でこの子守唄を紹介した牧野英三さん、子守唄の歴史的背景を雑誌『宇下の洞話』に掲載した洞川出身の農学博士・銭谷有司さん、文献資料をご提供下さった「天川を学ぶ会」の京谷友明さん、こうした地元の方がたの熱意の賜物であろう。改めて「いのちのバトン」を手渡されたと感じている。



連載

帯津良一

何はさておき 寄り添い合うことだ



以前は、といつてもつい2年ほど前は医療と医学が混同されていました。医療現場の中心で「エビデンス」「エビデンス」という呼び声が響いていたのがつい昨日のことのようです。

医療と医学とはもともと違うものなのです。お互いの効果を高めるためには、この両者をはっきりと分けて考えなければならぬのです。どのように扱っているか、まず辞書を引いてみましょう。まずは『広辞苑』、

医療・医術で病気をなおすこと。

医学：生体の構造・機能および疾病を研究し、
疾病の診断・治療・予防の方法を開発する学問。

次いで、『角川漢和辞典』

医療：医術で病気を治療すること。

医学：病気の治療・予防について研究する学問。

とあります。念のため、

医術：病気をなおす方法

とあります。

つまり、医学は学問であり、医療は臨床すなわち病床に臨むということになります。そして学問を支えるのは科学の知であり、当然、エビデンスが物を言うことになります。一方、臨床を支えるのは臨床の知であり、ここでは医療の効果だけではなく、ここに集う人々の作り出す「場」の働きが物を言うことになります。こうして、いろいろ思い巡らせながら、まずは**医療が戦いの最前線**なら

医学は最前線に必要な武器弾薬や食糧を届ける兵站部、今風に言えばロジスティクス。と考えました。そして

医療とは患者を中心に御家族、友人そして、医師をはじめさまざまな医療者が織りなす「場」の営み。

であると考えました。 どういうことかと言いますと、当事者の一人ひとりが、自らの内なる生命場のエネルギーを高めながら、患者さんをはじめ他の当事者の内なる生命場に思いを遣る。それによって医療と

いう共有する場のエネルギーが高まり、その結果、患者さんは病気を克服し、その他のすべての当事者が癒されていく。これが医療の本質であると考えました。

そして、医療という場のエネルギーを高めるためには、患者さんと当事者就中医療者が寄り添い合うことが最大の要因であることに気付いたのです。そこで、治したり癒したりは言わば方便であって、患者さんと医療者が寄り添い合うことこそ医療の本質であるという結論に至ったのでした。

たとえば、こんな具合にです。診察が済んで処方箋が認められ、次の外来日が決まると、

「ありがとうございます。」

と患者さんは立ち上がり、出口に向かいます。すかさず私も立ち上がり

「お大事に！」

と。あわてて振り向いた患者さんにはっこり笑いながら、

「先生もお大事に！」

と。いやあ、好いものです。なんともほのぼのと

した気持ちになるものです。これが一日に何回も繰り返されるのですから、医者冥利に尽きることはこのことです。



また、こんなこともあります。これまで、始終、高値安定を示していた腫瘍マーカーが始めて下降したのです。まだ正常範囲ではありませんが、かなりの下げ幅です。

「何か変わったことをなさいましたか」

「いえ、思い当たるようなことは何もありません。」

「……そうですか……。あなたの心掛けがいからですよー」

と。うれしきで顔を歪めた彼女が、いきなり抱きついてきます。これまた、ほのぼのとした気持ちになって好いものです。寄り添い合うことの最たるものではありませんか。

このように、一口に寄り添い合うといつてもいろいろです。しかし、寄り添い合うことが医療の本質であることはまちがいありません。その典型が畏友青木新門さんの『納棺夫日記』（文春文庫）にある次の文章です。

末期患者には、激励は酷で、善意は悲しい。説法も言葉もいらぬ。

きれいな青空のような瞳をした、すきとおった風のような人が、側にいるだけでいい。

側にいるということは、すなわち寄り添って

何か労働力が必要な場合に提供しますよと

言っ、からだで寄り添っているだけかも知れません。しかし、

きれいな青空のような瞳をした

となると、これはどうしても、こころで寄り添っていることとなりますし、

すきとおった風のような人

となると、これはどうみても、いのちで寄り添っている感じですよ。

このように、青木新門さんは、医療における寄り添うとは、からだに寄り添い、こころに寄り添い、いのちに寄り添う。つまり、人間まるごと同志が寄り添うことであることをすでお見通しだったのです。さすがです。ホリスティック医学の先達と言ってもよいのではないのでしょうか。

また、私は白隠禅師の呼吸法の流れを汲む「調和道協会」の会長として、谷中にある臨済宗の名刹「全生庵」で定期的に講演をしている時期がありました。会場は畳敷きの本堂なのですが、時々、若い僧侶さんが、最後列にそっと坐って聴いてくれていました。ある時、その方が帰り際の私に声をかけて来ました。

「医療の本質が寄り添い合うことであると、する先生のお考えには私も賛成です。ただ私が見るところ、先生や看護師さんが寄り添っているのはからだか精々がこころまで、いのちに寄り添う方はいらっしやらないような気がするのですが、いかがなものでしょうか。」

と。初耳の話でしたので、

「えっ!? どういうことですか?」

と問いましたところ、

「私が見るところ医療者の方は、死をいのちの終りと見るから、いのちがそこで終わってしまつて寄り添えないのではないのでしょうか。死をいのちのプロセスの一つと考えると、死の向こう側、つまり死後の世界が見えて来るので、寄り添うことができるのではないのでしょうか。」

頭をがっつんと叩かれたような思いでした。そしてこの世だけを見ていたのでは人間まるごとを見るホリスティック医学にはならない。この世とあの世をしっかりと見据えてはじめて人間まるごとなのだとい瞬にして覚ったのでした。そして、青木新門さんの

きれいな青空のような瞳をした、すきとおった風のような人

がこれまた一瞬にして蘇って来たのです。重ねて言いますが、さすがは青木新門さんです。寄り添うことの極致を見事に表しています。



帯津良一 プロフィール

1936年、埼玉県川越市に生まれる。東京大学医学部卒業、医学博士。東大医学部第三外科に入局し、その後都立駒込病院外科医長を経て1982年、川越市に帯津三敬病院を設立。2004年には、池袋に統合医学の拠点、帯津三敬塾クリニックを開設。
日本ホリスティック医学協会名誉会長。著書に「代替療法はなぜ効くのか?」「健康問答」など。その数は100冊を超える。

皆でコメ作り



南無庵 庵主 山根 光恵
山口県長門市出身
浄土真宗本願寺派 布教使

ここ直島の人たちは、畑作りが好きで、上手な人が多い。皆、朝早くから畑に出て草をとったり、野菜を植えたりする。そしてそれを売る訳でもなく、親戚や親しい人に分け合って楽しんでいる。「よかつたら食べてよ」と、私も旬の野菜をいただくことがあり、とても助かっている。特に冬の寒い頃は、大根、白菜、春菊など、採れたての野菜をいただくから、鍋料理をする時は、肉か魚を買うだけで、鍋いっぱいのごちそうに恵まれる。

しかし、島に来てすぐの頃、そういえば不思議だな？と気が付いたことがある。それは、島に「田んぼ」がないことだ。

日本ではどこの田舎へ行っても、ちょっとした平地には田んぼがあるし、山の傾斜地では棚田がある風景が普通である。田んぼの近くを通ると、稲苗の風のそよぎを感じられ、ちよっとした扇風機よりもずっと涼しく、とても心地良いものだ。そんな田んぼが、直島には見当たらないのだ。

もしや直島は美術館やアートスポットに占領されて田んぼがなくなったのかな？とも初めは思っ

たが、聞けば積浦（つむうら）地区には昔はかなり田んぼがあったそうだ。

そこは島の東側なので日当たりが良く、おいしいお米がたくさんできていたらしい。ところがどんどん近代化するにつれ休耕田が増え、米作りをしなくなったのだ。

そんな直島で、荒れ果てた土地を再び耕し、また皆で米作りをして楽しみ、島の文化も見つめ直そうという「直島コメづくりプロジェクト」が福武財団主催で2006年に発足した。子どもや大人、観光客も入り混じって、皆で田んぼの世話をしている。

私も元気なうちにちよっとでも関わりたいと思いい、今年の田植えに参加した。

子どもの頃、近所の農家の田植えを手伝ったことがある。むしろ、邪魔をしに行ったようなものかもしれないが、それ以来だ。友達に作ってもらったモンペをはき、泥田のなかに入った。まだ6月の暑い日で、田んぼに入ると、背中は焼け付くようだった。



田植えの様子

前日、大雨が降ったので、田んぼの水は膝まであり、ぬるぬるとした泥の中で足を動かすと尻もちを搦きそうだった。これは転ばないうちに……と、早々に田んぼを出た。参加者では私が一番の高齢者だったかもしれない。この田植えの際、ポリバケツにも少し植えてもらい、家を持って帰った。

6月の田植えが済むと、草取りや水の管理などボランティアの人たちが秋の取入れまで管理する。そして、皆で稲刈りをする。ボランティアの人たちは、こうした田植えや稲刈りのイベントごとに、朝早くからカレーやお寿司などを作っていて大変忙しそう。本当にお疲れ様です、という感謝の思いで一杯だ。

今年は稲が実った頃に、猪の親子連れが来かなり食べられてしまったとのこと。人間が食べる前のお米は、さぞ美味しかったことであろう。田植えから始まり、草取り、水の管理、稲刈り、稲干、脱穀等々、稲から食べられるお米になるまでの手間は並大抵ではないと、皆が思い知る暮れには、餅つきでついた餅が皆にふるまわれる

活動報告

9月

- 京都市立堀川音楽高等学校音楽ホールにてファミリコンサート開催
- 里見哲夫「自然教室」、高橋美清「青空説法」、浅野美由紀「手相鑑定」(月例)
- 相川厚生生き健康教室「糖尿病について」★特別講演
- 大島満吉「平和をねがう戦争を考える」
- 奇跡の生還者「満州で知られていない凄惨な事件―葛根廟事件―」
- ★山口県周防大島視察訪問団のんたの会会長 安元稔、4名がねぎぼうず館視察。夜は下仁田館にて元宮内庁長官羽毛田信吾氏も参加して懇親会
- こども配食 第2・第4木曜日(月例)
- らばい通信 編集発行

10月

- 下仁田社会福祉協議会二行ねぎぼうず館視察
- 高橋美清・高橋操、フジコの部屋でコンサート
- 相川厚生生き健康教室「温泉の効用」
- 黛治夫・一子「自然とふるさと」教室

11月

- 群澤馬福祉協議会二行ねぎぼうず館視察
- 平澤仁・後藤泉、フジコの部屋にて二人のコンサート
- 京都から佐久間憲一 来訪、近藤征治、詩人の国見修二、貝塚津音夫、三氏が松永伍一資料館設置。夜は西野牧舎で「イノシシ鍋」で会食
- 相川厚生生き健康教室「冷感性対策」

12月

- 神崎邦子氏と女性たちの視察とコンサート
- ★ちいさなシャンソンコンサート開催
- レインボー・カルテット「クリスマスコンサート」開催
- 藤原書店社主 藤原良夫講演会「危ない時代の処方箋」、里見哲夫「自然の教室」の皆様と座談
- クリスマス忘年会
- らばい通信 編集発行

1月〜2月

ねぎぼうず館 休館

(敬称略)



が、米作りの大変さを知っているからこそ、そのお餅の美味しさは、スーパーで手軽に買ったお餅に比べて、格別な味わい深さがあると思う。我が家では、ポリバケツに植えてもらった稲が6月から9月の間にしっかりと成長して立派な稲穂になった。刈り取って天日に干して、正月には、稲穂をほんの少し油で揚げて、おせちの膳の横に飾ろうと思っている。そして、白くはじけた米粒を一粒ずつ「今年も良い年でありますように」と味わいながらいただくと思う。

合掌



猪の親子



稲穂干し



応援がしててくださいます

協会の活動にご協力くださいました皆様、ご寄付を有効に使わせて頂きます。これからも日本子守唄協会への応援をよろしくお願ひ申し上げます。

2024年4月1日から2024年12月10日現在 五十音順 匿名希望18名(敬称略)

【個人】

- | | | | | | | |
|-------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 青木健次 | 江崎英敏 | 神戶精一 | 杉西恭子 | 長尾忠行 | 本條秀太郎 | 谷秋昌道 |
| 青木友一 | 江藤昭子 | 菊池弥生 | 杉野善彦 | 中島富志子 | 増田善弘 | 山浦敬子 |
| 青戸雅之 | 海老名香葉子 | 北 美 | 杉本太郎一 | 永田 亨 | 松崎マチ子 | 山川 忠 |
| 青山成夫 | 大石照美 | 北出広子 | 須川俊夫 | 長縄千鶴子 | 松代洋子 | 山口敬明 |
| 青山司 | 大川幸枝 | 木戸由加利 | 鈴木聖子 | 中根宏昭 | 松永静江 | 山崎秀甲 |
| 赤枝恒雄 | 大河原敏雄 | 木下俊明 | 鈴木とよし | 永野一昭 | 松永忠夫 | 山下五郎 |
| 赤坂みどり | 大原尚夫 | 木邊田慈 | マツチ坊や | 永見徳代 | 丸山恒子 | 山根光恵 |
| 秋山忠彌 | 大里悦子 | 木村賢史 | 鈴木善弘 | 中山修治 | 三浦眞澄 | 山元絵津子 |
| 浅井典子 | 大嶋孝造 | 木村泰雄 | 国見二 | 西尾まき | 三浦義孝 | 山本ヤエ子 |
| 浅香俊二 | 大嶋満吉 | 久良木恵子 | 久高正明 | 西川敏之 | 三上章道 | 湯川れい子 |
| 浅見哲夫 | 大野隆吉 | 黒澤正明 | 高瀬得尋 | 西前幸子 | 三田和代 | 宮崎清 |
| 浅利香津代 | 近江千穂 | 下條泰生 | 高橋展子 | 高橋如晴 | 三田村慶春 | 宮崎直子 |
| 麻生 智 | 大村文雄 | 小井土洋一 | 高橋栄子 | 高橋敬博 | 三田村慶春 | 宮崎直子 |
| 安倍昭恵 | 大村文雄 | 小嶋潤一 | 高橋如晴 | 高橋敬博 | 三田村慶春 | 宮崎直子 |
| 阿部輝彦 | 大川幸枝 | 小嶋潤一 | 高橋如晴 | 高橋敬博 | 三田村慶春 | 宮崎直子 |
| 蘭日出哉 | 大川幸枝 | 小嶋潤一 | 高橋如晴 | 高橋敬博 | 三田村慶春 | 宮崎直子 |
| 有馬 絹 | 大川幸枝 | 小嶋潤一 | 高橋如晴 | 高橋敬博 | 三田村慶春 | 宮崎直子 |
| 安藤和代 | 大川幸枝 | 小嶋潤一 | 高橋如晴 | 高橋敬博 | 三田村慶春 | 宮崎直子 |
| 井口久美子 | 大川幸枝 | 小嶋潤一 | 高橋如晴 | 高橋敬博 | 三田村慶春 | 宮崎直子 |
| 井坂義雄 | 大川幸枝 | 小嶋潤一 | 高橋如晴 | 高橋敬博 | 三田村慶春 | 宮崎直子 |
| 石川昭子 | 大川幸枝 | 小嶋潤一 | 高橋如晴 | 高橋敬博 | 三田村慶春 | 宮崎直子 |
| 泉 幹子 | 大川幸枝 | 小嶋潤一 | 高橋如晴 | 高橋敬博 | 三田村慶春 | 宮崎直子 |
| 磯崎節子 | 大川幸枝 | 小嶋潤一 | 高橋如晴 | 高橋敬博 | 三田村慶春 | 宮崎直子 |
| 磯部裕子 | 大川幸枝 | 小嶋潤一 | 高橋如晴 | 高橋敬博 | 三田村慶春 | 宮崎直子 |
| 井田範子 | 大川幸枝 | 小嶋潤一 | 高橋如晴 | 高橋敬博 | 三田村慶春 | 宮崎直子 |
| 市塚 廣 | 大川幸枝 | 小嶋潤一 | 高橋如晴 | 高橋敬博 | 三田村慶春 | 宮崎直子 |
| 伊藤守 | 大川幸枝 | 小嶋潤一 | 高橋如晴 | 高橋敬博 | 三田村慶春 | 宮崎直子 |
| 伊庭桂子 | 大川幸枝 | 小嶋潤一 | 高橋如晴 | 高橋敬博 | 三田村慶春 | 宮崎直子 |
| 井上かず子 | 大川幸枝 | 小嶋潤一 | 高橋如晴 | 高橋敬博 | 三田村慶春 | 宮崎直子 |
| 井上小太郎 | 大川幸枝 | 小嶋潤一 | 高橋如晴 | 高橋敬博 | 三田村慶春 | 宮崎直子 |
| 猪塚育代 | 大川幸枝 | 小嶋潤一 | 高橋如晴 | 高橋敬博 | 三田村慶春 | 宮崎直子 |
| 今井弘子 | 大川幸枝 | 小嶋潤一 | 高橋如晴 | 高橋敬博 | 三田村慶春 | 宮崎直子 |
| 今井要一 | 大川幸枝 | 小嶋潤一 | 高橋如晴 | 高橋敬博 | 三田村慶春 | 宮崎直子 |
| 今村 威 | 大川幸枝 | 小嶋潤一 | 高橋如晴 | 高橋敬博 | 三田村慶春 | 宮崎直子 |
| 今元弘子 | 大川幸枝 | 小嶋潤一 | 高橋如晴 | 高橋敬博 | 三田村慶春 | 宮崎直子 |
| 上原孝子 | 大川幸枝 | 小嶋潤一 | 高橋如晴 | 高橋敬博 | 三田村慶春 | 宮崎直子 |
| 白田則子 | 大川幸枝 | 小嶋潤一 | 高橋如晴 | 高橋敬博 | 三田村慶春 | 宮崎直子 |
| 白田武正 | 大川幸枝 | 小嶋潤一 | 高橋如晴 | 高橋敬博 | 三田村慶春 | 宮崎直子 |
| 内野綾子 | 大川幸枝 | 小嶋潤一 | 高橋如晴 | 高橋敬博 | 三田村慶春 | 宮崎直子 |
| 内野祐介 | 大川幸枝 | 小嶋潤一 | 高橋如晴 | 高橋敬博 | 三田村慶春 | 宮崎直子 |
| 梅野那子 | 大川幸枝 | 小嶋潤一 | 高橋如晴 | 高橋敬博 | 三田村慶春 | 宮崎直子 |
| 梅井正明 | 大川幸枝 | 小嶋潤一 | 高橋如晴 | 高橋敬博 | 三田村慶春 | 宮崎直子 |

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|------|------|-------|------|------|-------|------|------|------|------|------|------|------|-------|------|------|------|-------|------|------|-------|------|------|------|------|------|------|-------|------|-------|-------|------|-------|------|------|------|------|-------|------|------|------|------|------|------|------|-------|------|------|------|-------|------|------|------|------|-------|------|------|------|------|------|-----|------|-------|-------|------|--------|------|------|------|------|------|-------|-------|------|------|------|------|------|------|-------|------|------|------|-------|------|------|-------|------|------|------|------|------|------|-------|------|-------|-------|------|-------|------|------|------|------|-------|------|------|------|------|------|------|------|-------|------|------|------|-------|------|------|------|------|-------|------|------|------|------|------|-----|------|-------|-------|------|--------|------|------|------|------|------|-------|-------|------|------|------|------|------|------|-------|------|------|------|-------|------|------|-------|------|------|------|------|------|------|-------|------|-------|-------|------|-------|------|------|------|------|-------|------|------|------|------|------|------|------|-------|------|------|------|-------|------|------|------|------|-------|------|------|------|------|------|-----|------|-------|-------|------|--------|------|------|------|------|------|-------|-------|------|------|------|------|------|------|-------|------|------|------|-------|------|------|-------|------|------|------|------|------|------|-------|------|-------|-------|------|-------|------|------|------|------|-------|------|------|------|------|------|------|------|-------|------|------|------|-------|------|------|------|------|-------|------|------|------|------|------|-----|------|-------|-------|------|--------|------|------|------|------|------|-------|-------|------|------|------|------|------|------|-------|------|------|------|-------|------|------|-------|------|------|------|------|------|------|-------|------|-------|-------|------|-------|------|------|------|------|-------|------|------|------|------|------|------|------|-------|------|------|------|-------|------|------|------|------|-------|------|------|------|------|------|-----|------|-------|-------|------|--------|------|------|------|------|------|-------|-------|------|------|------|------|------|------|-------|------|------|------|-------|------|------|-------|------|------|------|------|------|------|-------|------|-------|-------|------|-------|------|------|------|------|-------|------|------|------|------|------|------|------|-------|------|------|------|-------|------|------|------|------|-------|------|------|------|------|------|-----|------|-------|-------|------|--------|------|------|------|------|------|-------|-------|------|------|------|------|------|------|-------|------|------|------|-------|------|------|-------|------|------|------|------|------|------|-------|------|-------|-------|------|-------|------|------|------|------|-------|------|------|------|------|------|------|------|-------|------|------|------|-------|------|------|------|------|-------|------|------|------|------|------|-----|------|-------|-------|------|--------|------|------|------|------|------|-------|-------|------|------|------|------|------|------|-------|------|------|------|-------|------|------|-------|------|------|------|------|------|------|-------|------|-------|-------|------|-------|------|------|------|------|-------|------|------|------|------|------|------|------|-------|------|------|------|-------|------|------|------|------|-------|------|------|------|------|------|-----|------|-------|-------|------|--------|------|------|------|------|------|-------|-------|------|------|------|------|------|------|-------|------|------|------|-------|------|------|-------|------|------|------|------|------|------|-------|------|-------|-------|------|-------|------|------|------|------|-------|------|------|------|------|------|------|------|-------|------|------|------|-------|------|------|------|------|-------|------|------|------|------|------|-----|------|-------|-------|------|--------|------|------|------|------|------|-------|-------|------|------|------|------|------|------|-------|------|------|------|-------|------|------|-------|------|------|------|------|------|------|-------|------|-------|-------|------|-------|------|------|------|------|-------|------|------|------|------|------|------|------|-------|------|------|------|-------|------|------|------|------|-------|------|------|------|------|------|-----|------|-------|-------|------|--------|------|------|------|------|------|-------|-------|------|------|------|------|------|------|-------|------|------|------|-------|------|------|-------|------|------|------|------|------|------|-------|------|-------|-------|------|-------|------|------|------|------|-------|------|------|------|------|------|------|------|-------|------|------|------|-------|------|------|------|------|-------|------|------|------|------|------|-----|------|-------|-------|------|--------|------|------|------|------|------|-------|-------|------|------|------|------|------|------|-------|------|------|------|-------|------|------|-------|------|------|------|------|------|------|-------|------|-------|-------|------|-------|------|------|------|------|-------|------|------|------|------|------|------|------|-------|------|------|------|-------|------|------|------|------|-------|------|------|------|------|------|-----|------|-------|-------|------|--------|------|------|------|------|------|-------|-------|------|------|------|------|------|------|-------|------|------|------|-------|------|------|-------|------|------|------|------|------|------|-------|------|-------|-------|------|-------|------|------|------|------|-------|------|------|------|------|------|------|------|-------|------|------|------|-------|------|------|------|------|-------|------|------|------|------|------|-----|------|-------|-------|------|--------|------|------|------|------|------|-------|-------|------|------|------|------|----|
| 菅原芳徳 | 菅田豊子 | 菅佐原道夫 | 須賀正二 | 神 秀俊 | 白石源次郎 | 清水睦夫 | 篠原毅彦 | 辻 容子 | 徳永雅博 | 鳥取英記 | 土木正美 | 泊 和男 | 富田富士也 | 砥綿隆昌 | 奈加靖子 | 杉野善彦 | 杉本太郎一 | 須川俊夫 | 鈴木聖子 | 鈴木とよし | 鈴木善弘 | 瀨端真弓 | 西尾まき | 西尾路子 | 西川敏之 | 西前幸子 | 庭山正一郎 | 則武清司 | 羽田田信吾 | 橋野三千夫 | 橋本 昌 | 長谷川芳博 | 八戸保彦 | 初澤 彩 | 馬場 妙 | 濱口敦子 | 武井真紀子 | 高松榮子 | 高橋宏子 | 高橋如晴 | 高橋敬博 | 高橋栄子 | 高橋展子 | 高瀬得尋 | 高田正一郎 | 高田知江 | 黒澤正明 | 下條泰生 | 小井土洋一 | 小井洋子 | 後藤洋子 | 古川洋文 | 古川洋子 | 小林ヒデ子 | 小山啓子 | 近藤征治 | 金野光宏 | 齋藤桂子 | 齋藤進也 | 華工房 | 酒井重美 | 坂口佳志江 | 坂野美恵子 | 坂元威子 | 佐々木喜久子 | 佐藤公夫 | 佐藤久子 | 佐藤久光 | 佐藤 穰 | 沢田茂子 | 千野千鶴子 | 千野千鶴子 | 千原 伝 | 辻 容子 | 徳永雅博 | 鳥取英記 | 土木正美 | 泊 和男 | 富田富士也 | 砥綿隆昌 | 奈加靖子 | 杉野善彦 | 杉本太郎一 | 須川俊夫 | 鈴木聖子 | 鈴木とよし | 鈴木善弘 | 瀨端真弓 | 西尾まき | 西尾路子 | 西川敏之 | 西前幸子 | 庭山正一郎 | 則武清司 | 羽田田信吾 | 橋野三千夫 | 橋本 昌 | 長谷川芳博 | 八戸保彦 | 初澤 彩 | 馬場 妙 | 濱口敦子 | 武井真紀子 | 高松榮子 | 高橋宏子 | 高橋如晴 | 高橋敬博 | 高橋栄子 | 高橋展子 | 高瀬得尋 | 高田正一郎 | 高田知江 | 黒澤正明 | 下條泰生 | 小井土洋一 | 小井洋子 | 後藤洋子 | 古川洋文 | 古川洋子 | 小林ヒデ子 | 小山啓子 | 近藤征治 | 金野光宏 | 齋藤桂子 | 齋藤進也 | 華工房 | 酒井重美 | 坂口佳志江 | 坂野美恵子 | 坂元威子 | 佐々木喜久子 | 佐藤公夫 | 佐藤久子 | 佐藤久光 | 佐藤 穰 | 沢田茂子 | 千野千鶴子 | 千野千鶴子 | 千原 伝 | 辻 容子 | 徳永雅博 | 鳥取英記 | 土木正美 | 泊 和男 | 富田富士也 | 砥綿隆昌 | 奈加靖子 | 杉野善彦 | 杉本太郎一 | 須川俊夫 | 鈴木聖子 | 鈴木とよし | 鈴木善弘 | 瀨端真弓 | 西尾まき | 西尾路子 | 西川敏之 | 西前幸子 | 庭山正一郎 | 則武清司 | 羽田田信吾 | 橋野三千夫 | 橋本 昌 | 長谷川芳博 | 八戸保彦 | 初澤 彩 | 馬場 妙 | 濱口敦子 | 武井真紀子 | 高松榮子 | 高橋宏子 | 高橋如晴 | 高橋敬博 | 高橋栄子 | 高橋展子 | 高瀬得尋 | 高田正一郎 | 高田知江 | 黒澤正明 | 下條泰生 | 小井土洋一 | 小井洋子 | 後藤洋子 | 古川洋文 | 古川洋子 | 小林ヒデ子 | 小山啓子 | 近藤征治 | 金野光宏 | 齋藤桂子 | 齋藤進也 | 華工房 | 酒井重美 | 坂口佳志江 | 坂野美恵子 | 坂元威子 | 佐々木喜久子 | 佐藤公夫 | 佐藤久子 | 佐藤久光 | 佐藤 穰 | 沢田茂子 | 千野千鶴子 | 千野千鶴子 | 千原 伝 | 辻 容子 | 徳永雅博 | 鳥取英記 | 土木正美 | 泊 和男 | 富田富士也 | 砥綿隆昌 | 奈加靖子 | 杉野善彦 | 杉本太郎一 | 須川俊夫 | 鈴木聖子 | 鈴木とよし | 鈴木善弘 | 瀨端真弓 | 西尾まき | 西尾路子 | 西川敏之 | 西前幸子 | 庭山正一郎 | 則武清司 | 羽田田信吾 | 橋野三千夫 | 橋本 昌 | 長谷川芳博 | 八戸保彦 | 初澤 彩 | 馬場 妙 | 濱口敦子 | 武井真紀子 | 高松榮子 | 高橋宏子 | 高橋如晴 | 高橋敬博 | 高橋栄子 | 高橋展子 | 高瀬得尋 | 高田正一郎 | 高田知江 | 黒澤正明 | 下條泰生 | 小井土洋一 | 小井洋子 | 後藤洋子 | 古川洋文 | 古川洋子 | 小林ヒデ子 | 小山啓子 | 近藤征治 | 金野光宏 | 齋藤桂子 | 齋藤進也 | 華工房 | 酒井重美 | 坂口佳志江 | 坂野美恵子 | 坂元威子 | 佐々木喜久子 | 佐藤公夫 | 佐藤久子 | 佐藤久光 | 佐藤 穰 | 沢田茂子 | 千野千鶴子 | 千野千鶴子 | 千原 伝 | 辻 容子 | 徳永雅博 | 鳥取英記 | 土木正美 | 泊 和男 | 富田富士也 | 砥綿隆昌 | 奈加靖子 | 杉野善彦 | 杉本太郎一 | 須川俊夫 | 鈴木聖子 | 鈴木とよし | 鈴木善弘 | 瀨端真弓 | 西尾まき | 西尾路子 | 西川敏之 | 西前幸子 | 庭山正一郎 | 則武清司 | 羽田田信吾 | 橋野三千夫 | 橋本 昌 | 長谷川芳博 | 八戸保彦 | 初澤 彩 | 馬場 妙 | 濱口敦子 | 武井真紀子 | 高松榮子 | 高橋宏子 | 高橋如晴 | 高橋敬博 | 高橋栄子 | 高橋展子 | 高瀬得尋 | 高田正一郎 | 高田知江 | 黒澤正明 | 下條泰生 | 小井土洋一 | 小井洋子 | 後藤洋子 | 古川洋文 | 古川洋子 | 小林ヒデ子 | 小山啓子 | 近藤征治 | 金野光宏 | 齋藤桂子 | 齋藤進也 | 華工房 | 酒井重美 | 坂口佳志江 | 坂野美恵子 | 坂元威子 | 佐々木喜久子 | 佐藤公夫 | 佐藤久子 | 佐藤久光 | 佐藤 穰 | 沢田茂子 | 千野千鶴子 | 千野千鶴子 | 千原 伝 | 辻 容子 | 徳永雅博 | 鳥取英記 | 土木正美 | 泊 和男 | 富田富士也 | 砥綿隆昌 | 奈加靖子 | 杉野善彦 | 杉本太郎一 | 須川俊夫 | 鈴木聖子 | 鈴木とよし | 鈴木善弘 | 瀨端真弓 | 西尾まき | 西尾路子 | 西川敏之 | 西前幸子 | 庭山正一郎 | 則武清司 | 羽田田信吾 | 橋野三千夫 | 橋本 昌 | 長谷川芳博 | 八戸保彦 | 初澤 彩 | 馬場 妙 | 濱口敦子 | 武井真紀子 | 高松榮子 | 高橋宏子 | 高橋如晴 | 高橋敬博 | 高橋栄子 | 高橋展子 | 高瀬得尋 | 高田正一郎 | 高田知江 | 黒澤正明 | 下條泰生 | 小井土洋一 | 小井洋子 | 後藤洋子 | 古川洋文 | 古川洋子 | 小林ヒデ子 | 小山啓子 | 近藤征治 | 金野光宏 | 齋藤桂子 | 齋藤進也 | 華工房 | 酒井重美 | 坂口佳志江 | 坂野美恵子 | 坂元威子 | 佐々木喜久子 | 佐藤公夫 | 佐藤久子 | 佐藤久光 | 佐藤 穰 | 沢田茂子 | 千野千鶴子 | 千野千鶴子 | 千原 伝 | 辻 容子 | 徳永雅博 | 鳥取英記 | 土木正美 | 泊 和男 | 富田富士也 | 砥綿隆昌 | 奈加靖子 | 杉野善彦 | 杉本太郎一 | 須川俊夫 | 鈴木聖子 | 鈴木とよし | 鈴木善弘 | 瀨端真弓 | 西尾まき | 西尾路子 | 西川敏之 | 西前幸子 | 庭山正一郎 | 則武清司 | 羽田田信吾 | 橋野三千夫 | 橋本 昌 | 長谷川芳博 | 八戸保彦 | 初澤 彩 | 馬場 妙 | 濱口敦子 | 武井真紀子 | 高松榮子 | 高橋宏子 | 高橋如晴 | 高橋敬博 | 高橋栄子 | 高橋展子 | 高瀬得尋 | 高田正一郎 | 高田知江 | 黒澤正明 | 下條泰生 | 小井土洋一 | 小井洋子 | 後藤洋子 | 古川洋文 | 古川洋子 | 小林ヒデ子 | 小山啓子 | 近藤征治 | 金野光宏 | 齋藤桂子 | 齋藤進也 | 華工房 | 酒井重美 | 坂口佳志江 | 坂野美恵子 | 坂元威子 | 佐々木喜久子 | 佐藤公夫 | 佐藤久子 | 佐藤久光 | 佐藤 穰 | 沢田茂子 | 千野千鶴子 | 千野千鶴子 | 千原 伝 | 辻 容子 | 徳永雅博 | 鳥取英記 | 土木正美 | 泊 和男 | 富田富士也 | 砥綿隆昌 | 奈加靖子 | 杉野善彦 | 杉本太郎一 | 須川俊夫 | 鈴木聖子 | 鈴木とよし | 鈴木善弘 | 瀨端真弓 | 西尾まき | 西尾路子 | 西川敏之 | 西前幸子 | 庭山正一郎 | 則武清司 | 羽田田信吾 | 橋野三千夫 | 橋本 昌 | 長谷川芳博 | 八戸保彦 | 初澤 彩 | 馬場 妙 | 濱口敦子 | 武井真紀子 | 高松榮子 | 高橋宏子 | 高橋如晴 | 高橋敬博 | 高橋栄子 | 高橋展子 | 高瀬得尋 | 高田正一郎 | 高田知江 | 黒澤正明 | 下條泰生 | 小井土洋一 | 小井洋子 | 後藤洋子 | 古川洋文 | 古川洋子 | 小林ヒデ子 | 小山啓子 | 近藤征治 | 金野光宏 | 齋藤桂子 | 齋藤進也 | 華工房 | 酒井重美 | 坂口佳志江 | 坂野美恵子 | 坂元威子 | 佐々木喜久子 | 佐藤公夫 | 佐藤久子 | 佐藤久光 | 佐藤 穰 | 沢田茂子 | 千野千鶴子 | 千野千鶴子 | 千原 伝 | 辻 容子 | 徳永雅博 | 鳥取英記 | 土木正美 | 泊 和男 | 富田富士也 | 砥綿隆昌 | 奈加靖子 | 杉野善彦 | 杉本太郎一 | 須川俊夫 | 鈴木聖子 | 鈴木とよし | 鈴木善弘 | 瀨端真弓 | 西尾まき | 西尾路子 | 西川敏之 | 西前幸子 | 庭山正一郎 | 則武清司 | 羽田田信吾 | 橋野三千夫 | 橋本 昌 | 長谷川芳博 | 八戸保彦 | 初澤 彩 | 馬場 妙 | 濱口敦子 | 武井真紀子 | 高松榮子 | 高橋宏子 | 高橋如晴 | 高橋敬博 | 高橋栄子 | 高橋展子 | 高瀬得尋 | 高田正一郎 | 高田知江 | 黒澤正明 | 下條泰生 | 小井土洋一 | 小井洋子 | 後藤洋子 | 古川洋文 | 古川洋子 | 小林ヒデ子 | 小山啓子 | 近藤征治 | 金野光宏 | 齋藤桂子 | 齋藤進也 | 華工房 | 酒井重美 | 坂口佳志江 | 坂野美恵子 | 坂元威子 | 佐々木喜久子 | 佐藤公夫 | 佐藤久子 | 佐藤久光 | 佐藤 穰 | 沢田茂子 | 千野千鶴子 | 千野千鶴子 | 千原 伝 | 辻 容子 | 徳永雅博 | 鳥取英記 | 土木正美 | 泊 和男 | 富田富士也 | 砥綿隆昌 | 奈加靖子 | 杉野善彦 | 杉本太郎一 | 須川俊夫 | 鈴木聖子 | 鈴木とよし | 鈴木善弘 | 瀨端真弓 | 西尾まき | 西尾路子 | 西川敏之 | 西前幸子 | 庭山正一郎 | 則武清司 | 羽田田信吾 | 橋野三千夫 | 橋本 昌 | 長谷川芳博 | 八戸保彦 | 初澤 彩 | 馬場 妙 | 濱口敦子 | 武井真紀子 | 高松榮子 | 高橋宏子 | 高橋如晴 | 高橋敬博 | 高橋栄子 | 高橋展子 | 高瀬得尋 | 高田正一郎 | 高田知江 | 黒澤正明 | 下條泰生 | 小井土洋一 | 小井洋子 | 後藤洋子 | 古川洋文 | 古川洋子 | 小林ヒデ子 | 小山啓子 | 近藤征治 | 金野光宏 | 齋藤桂子 | 齋藤進也 | 華工房 | 酒井重美 | 坂口佳志江 | 坂野美恵子 | 坂元威子 | 佐々木喜久子 | 佐藤公夫 | 佐藤久子 | 佐藤久光 | 佐藤 穰 | 沢田茂子 | 千野千鶴子 | 千野千鶴子 | 千原 伝 | 辻 容子 | 徳永雅博 | 鳥取英記 | 土木正美 | 泊 和男 | 富田富士也 | 砥綿隆昌 | 奈加靖子 | 杉野善彦 | 杉本太郎一 | 須川俊夫 | 鈴木聖子 | 鈴木とよし | 鈴木善弘 | 瀨端真弓 | 西尾まき | 西尾路子 | 西川敏之 | 西前幸子 | 庭山正一郎 | 則武清司 | 羽田田信吾 | 橋野三千夫 | 橋本 昌 | 長谷川芳博 | 八戸保彦 | 初澤 彩 | 馬場 妙 | 濱口敦子 | 武井真紀子 | 高松榮子 | 高橋宏子 | 高橋如晴 | 高橋敬博 | 高橋栄子 | 高橋展子 | 高瀬得尋 | 高田正一郎 | 高田知江 | 黒澤正明 | 下條泰生 | 小井土洋一 | 小井洋子 | 後藤洋子 | 古川洋文 | 古川洋子 | 小林ヒデ子 | 小山啓子 | 近藤征治 | 金野光宏 | 齋藤桂子 | 齋藤進也 | 華工房 | 酒井重美 | 坂口佳志江 | 坂野美恵子 | 坂元威子 | 佐々木喜久子 | 佐藤公夫 | 佐藤久子 | 佐藤久光 | 佐藤 穰 | 沢田茂子 | 千野千鶴子 | 千野千鶴子 | 千原 伝 | 辻 容子 | 徳永雅博 | 鳥取英記 | 土木正美 | 泊 和男 | 富田富士也 | 砥綿隆昌 | 奈加靖子 | 杉野善彦 | 杉本太郎一 | 須川俊夫 | 鈴木聖子 | 鈴木とよし | 鈴木善弘 | 瀨端真弓 | 西尾まき | 西尾路子 | 西川敏之 | 西前幸子 | 庭山正一郎 | 則武清司 | 羽田田信吾 | 橋野三千夫 | 橋本 昌 | 長谷川芳博 | 八戸保彦 | 初澤 彩 | 馬場 妙 | 濱口敦子 | 武井真紀子 | 高松榮子 | 高橋宏子 | 高橋如晴 | 高橋敬博 | 高橋栄子 | 高橋展子 | 高瀬得尋 | 高田正一郎 | 高田知江 | 黒澤正明 | 下條泰生 | 小井土洋一 | 小井洋子 | 後藤洋子 | 古川洋文 | 古川洋子 | 小林ヒデ子 | 小山啓子 | 近藤征治 | 金野光宏 | 齋藤桂子 | 齋藤進也 | 華工房 | 酒井重美 | 坂口佳志江 | 坂野美恵子 | 坂元威子 | 佐々木喜久子 | 佐藤公夫 | 佐藤久子 | 佐藤久光 | 佐藤 穰 | 沢田茂子 | 千野千鶴子 | 千野千鶴子 | 千原 伝 | 辻 容子 | 徳永雅博 | 鳥取英記 | 土木正美 | 泊 和男 | 富田富士也 | 砥綿隆昌 | 奈加靖子 | 杉野善彦 | 杉本太郎一 | 須川俊夫 | 鈴木聖子 | 鈴木とよし | 鈴木善弘 | 瀨端真弓 | 西尾まき | 西尾路子 | 西川敏之 | 西前幸子 | 庭山正一郎 | 則武清司 | 羽田田信吾 | 橋野三千夫 | 橋本 昌 | 長谷川芳博 | 八戸保彦 | 初澤 彩 | 馬場 妙 | 濱口敦子 | 武井真紀子 | 高松榮子 | 高橋宏子 | 高橋如晴 | 高橋敬博 | 高橋栄子 | 高橋展子 | 高瀬得尋 | 高田正一郎 | 高田知江 | 黒澤正明 | 下條泰生 | 小井土洋一 | 小井洋子 | 後藤洋子 | 古川洋文 | 古川洋子 | 小林ヒデ子 | 小山啓子 | 近藤征治 | 金野光宏 | 齋藤桂子 | 齋藤進也 | 華工房 | 酒井重美 | 坂口佳志江 | 坂野美恵子 | 坂元威子 | 佐々木喜久子 | 佐藤公夫 | 佐藤久子 | 佐藤久光 | 佐藤 穰 | 沢田茂子 | 千野千鶴子 | 千野千鶴子 | 千原 伝 | 辻 容子 | 徳永雅博 | 鳥取英記 | 土木 |
|------|------|-------|------|------|-------|------|------|------|------|------|------|------|-------|------|------|------|-------|------|------|-------|------|------|------|------|------|------|-------|------|-------|-------|------|-------|------|------|------|------|-------|------|------|------|------|------|------|------|-------|------|------|------|-------|------|------|------|------|-------|------|------|------|------|------|-----|------|-------|-------|------|--------|------|------|------|------|------|-------|-------|------|------|------|------|------|------|-------|------|------|------|-------|------|------|-------|------|------|------|------|------|------|-------|------|-------|-------|------|-------|------|------|------|------|-------|------|------|------|------|------|------|------|-------|------|------|------|-------|------|------|------|------|-------|------|------|------|------|------|-----|------|-------|-------|------|--------|------|------|------|------|------|-------|-------|------|------|------|------|------|------|-------|------|------|------|-------|------|------|-------|------|------|------|------|------|------|-------|------|-------|-------|------|-------|------|------|------|------|-------|------|------|------|------|------|------|------|-------|------|------|------|-------|------|------|------|------|-------|------|------|------|------|------|-----|------|-------|-------|------|--------|------|------|------|------|------|-------|-------|------|------|------|------|------|------|-------|------|------|------|-------|------|------|-------|------|------|------|------|------|------|-------|------|-------|-------|------|-------|------|------|------|------|-------|------|------|------|------|------|------|------|-------|------|------|------|-------|------|------|------|------|-------|------|------|------|------|------|-----|------|-------|-------|------|--------|------|------|------|------|------|-------|-------|------|------|------|------|------|------|-------|------|------|------|-------|------|------|-------|------|------|------|------|------|------|-------|------|-------|-------|------|-------|------|------|------|------|-------|------|------|------|------|------|------|------|-------|------|------|------|-------|------|------|------|------|-------|------|------|------|------|------|-----|------|-------|-------|------|--------|------|------|------|------|------|-------|-------|------|------|------|------|------|------|-------|------|------|------|-------|------|------|-------|------|------|------|------|------|------|-------|------|-------|-------|------|-------|------|------|------|------|-------|------|------|------|------|------|------|------|-------|------|------|------|-------|------|------|------|------|-------|------|------|------|------|------|-----|------|-------|-------|------|--------|------|------|------|------|------|-------|-------|------|------|------|------|------|------|-------|------|------|------|-------|------|------|-------|------|------|------|------|------|------|-------|------|-------|-------|------|-------|------|------|------|------|-------|------|------|------|------|------|------|------|-------|------|------|------|-------|------|------|------|------|-------|------|------|------|------|------|-----|------|-------|-------|------|--------|------|------|------|------|------|-------|-------|------|------|------|------|------|------|-------|------|------|------|-------|------|------|-------|------|------|------|------|------|------|-------|------|-------|-------|------|-------|------|------|------|------|-------|------|------|------|------|------|------|------|-------|------|------|------|-------|------|------|------|------|-------|------|------|------|------|------|-----|------|-------|-------|------|--------|------|------|------|------|------|-------|-------|------|------|------|------|------|------|-------|------|------|------|-------|------|------|-------|------|------|------|------|------|------|-------|------|-------|-------|------|-------|------|------|------|------|-------|------|------|------|------|------|------|------|-------|------|------|------|-------|------|------|------|------|-------|------|------|------|------|------|-----|------|-------|-------|------|--------|------|------|------|------|------|-------|-------|------|------|------|------|------|------|-------|------|------|------|-------|------|------|-------|------|------|------|------|------|------|-------|------|-------|-------|------|-------|------|------|------|------|-------|------|------|------|------|------|------|------|-------|------|------|------|-------|------|------|------|------|-------|------|------|------|------|------|-----|------|-------|-------|------|--------|------|------|------|------|------|-------|-------|------|------|------|------|------|------|-------|------|------|------|-------|------|------|-------|------|------|------|------|------|------|-------|------|-------|-------|------|-------|------|------|------|------|-------|------|------|------|------|------|------|------|-------|------|------|------|-------|------|------|------|------|-------|------|------|------|------|------|-----|------|-------|-------|------|--------|------|------|------|------|------|-------|-------|------|------|------|------|------|------|-------|------|------|------|-------|------|------|-------|------|------|------|------|------|------|-------|------|-------|-------|------|-------|------|------|------|------|-------|------|------|------|------|------|------|------|-------|------|------|------|-------|------|------|------|------|-------|------|------|------|------|------|-----|------|-------|-------|------|--------|------|------|------|------|------|-------|-------|------|------|------|------|------|------|-------|------|------|------|-------|------|------|-------|------|------|------|------|------|------|-------|------|-------|-------|------|-------|------|------|------|------|-------|------|------|------|------|------|------|------|-------|------|------|------|-------|------|------|------|------|-------|------|------|------|------|------|-----|------|-------|-------|------|--------|------|------|------|------|------|-------|-------|------|------|------|------|----|